

さんざんな目に遭う神

ルカによる福音書 18 : 1 - 8

18:01 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。 18:02 「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。 18:03 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。 18:04 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。 18:05 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」 18:06 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。 18:07 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。 18:08 言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

1節では、絶えず祈るようにと勧められています。けれども神が、わたしたちの祈りに必ずしも答えてくださるとは限らない。それがわたしたちの実感ではないでしょうか。答えてくださらないのは、「身勝手な祈りだからだ」とか、「きっと神様にはお考えがあるのだ」…などと考え、それなら祈らなくても「神様に任せておけばよい」となって、祈りから遠ざかってしまうという事はないでしょうか。けれどもイエスは、「気を落とさずに絶えず祈る」ことの大切さを教えておられます。「絶えず祈る」とはどういうことなのでしょう。

「神を畏れず、人を人とも思わない」(2節)とは、ひどい裁判官もいたものです。この短いお話の主人公はだれでしょうか。普通やもめであると思われがちですが、実は裁判官だということがお分かりでしょうか。はじめに紹介されていることからそのことがわかります。の裁判官は、神も人も畏れない、それで通してきたのです。起承転結で見れば、「起」は「ある町に裁判官がいた」、「承」は、「この人は非道な裁判官で通していた。」ところがこの裁判官に問題が起こり、話が展開していきます。「転」は3節からで、その冒頭に「ところが」という接続詞がついていることからそのことがわかります。この裁判官にとって厄介なことが降りかかったのです。5節には「うるさくてかなわない」「さんざんな目に遭わす」と、非常に誇張した表現が使われています。たまりかねた裁判官が出した結論(「結」)は、「彼女のために裁判をしてやろう。」です。

もちろん神様はこのようなひどい裁判官のような方ではありません。それではイエス様はどうしてこのような不誠実な裁判官に神様をたとえたのでしょうか。「いやあ、それはレトリックだよ。話を際立たせるためのテクニックだよ。」ということでしょうか。それはそうに違いないでしょう。6節7節にあるように、不正な裁判官でさえ執拗な訴えを聞くのだから、まして愛の神は聞いてくださらないはずがあろうか、ということです。けれどもこんな裁判官が現実にいるものでしょうか。あるいは「こんな裁判官もいないわけではないよな」と人々の心に訴えかけるものがあるのでしょうか。昔の話だからそんな裁判官がいたということでしょうか。わたしは違うと思います。いくら古代社会とはいえ、裁判官たるもの真剣に裁判をしたに違いありません。

このたとえ話の意味は、実際の裁判官を引き合いに出して、しつこく頼めば聞いてくれる裁判官

がいるのだから、まして愛の神は願いをかなえてくださる、というレトリックなのではないのです。このお話は、あくまでフィクションです。こんな裁判官は実際にはいないでしょう。ではイエスはこの作り話で、何をおっしゃりたかったのでしょうか。その答えは、6節にあります。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。」「聞きなさい」、イエスはここに特別な思いを込めておられるのです。4節5節の裁判官の言葉、ここに何か聴くに値する内容があるのでしょうか。

このフィクションには、裁判官の悩みが描かれています。ある意味、意気揚々と非道を貫いてきた裁判官。かれがどうしようもないほどに苦しめられたという、実際にはありえない話です。「うるさくてかなわない。」「さんざんな目に遭わされる。」しかも、自分の裁判スタイルを変えてまでも逃れたいと思った苦しみです。悪徳裁判官はやもめが苦しめばいいと思ったのかもしれませんが。けれどもやもめが苦しめば苦しむほど、訪問も執拗になり、逆に自分が苦しむ羽目に陥ってしまった。裁判官は自己矛盾を抱えたのです。裁判官はひどい目に遭って、心ならずも、正しい事をしなければならなくなったのです。ここには主義を貫けなかった裁判官の無念さがあふれています。でなければわざわざ「自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。」などといわないはずです。鬼のような裁判官が、たまりかねて仏にならなければならなかった。実にとぼけた話です。これを聞いた民衆は、落語でも聞くように笑いこけたのではないのでしょうか。この裁判官を変えたものは何でしょうか。それは苦しみです。地獄の鬼が、苦しみにたまりかねて、善行をなした。鬼の心を動かすのは苦しみなのです。

そして神は、苦しむ神です。イエスが「聞きなさい」とおっしゃる内容はこうです。「苦しみが鬼裁判官の動機になった。まして人々の苦しみをご自分のこととされる神が、行動されないということがあるだろうか。」このたとえ話が本当に人々の心に届いたのは、十字架で苦しむ神を見てからのことだったでしょう。イエスがおっしゃりたかったこと、それは神はあなたの切実な苦しみをご自分のこととしてわかっておられるということ、だからいましばらくその苦しみを神と共に抱えていこうということなのです。それが信仰です。あなたの心の十字架、そこには人となった神がかかっておられます。祈りは苦しみをなくしてくれないかもしれませんが。けれども祈りは、その苦しみを神と共に抱えていくことへとわたしたちを導びくのです。絶えず祈る、それは神と共に苦しみを抱えることです。